

魔界王子

人物

カイジ・ミツシエル（16）魔界王子

猪口美月（16）城南じょうなん高校一年生

斎藤実（16）美月の友人

金森優子（17）美月の友人

アイナ・ミツシエル（19）カイジの姉

ルシナ・アキレス（85）竜鳥りゅうちよう

サーシャ・ミツシエル（32）カイジの母

サジナ・ミツシエル（56）カイジの父

ハルマ・カルダン（53）魔界を狙っている

猪口五月（30）美月の母

猪口聖（34）美月の父

松原紀子（26）美月の担任

女子高校生

消防士

使用人

執事

家来

追っ手

○原宿駅・ホーム（朝）

ホームに、たくさんの人々が行き交っている。

駅員（声）「列車がまいります・・・お乗り

の方は白線までおさがりください・・・」

猪口美月（16）がホームを歩いている。

切れ長の目にさらさらとした長い髪をしている。

美月「確か、この辺だと思っただけ・・・」

美月、何かを探している。

美月・夢

○原宿駅・ホーム（朝）

たくさんの人がホームで電車を待っている。

列車が入って来る。

アイナ・ミツシエル（19）がホーム下に倒れ込む。

悲鳴を上げる人々。

美月、助けようとするが間に合わな

い。

列車は、無残にもアイナの上を通って
いく。数人の駅員たちがホームに駆け
寄る。

腰の曲がった老婆、ルシナ・アキレス
(85)が美月を見ている。

○猪口家・ダイニング(朝)

ダイニングで新聞を読んでいる猪口聖
(34)。

猪口五月(30)がキッチンで洗い物を
している。

美月が制服姿でパンを加えて学校へ行
く準備をしている。

猪口、美月を見て、

猪口「美月、ちゃんとテーブルに座って食べ
なさい」

美月「急いでるんだもん」

口をとがらせる美月。

猪口が五月に向かって、

猪口「お前が甘やかすからいけないんだぞ」

五月、笑って

五月「はい、はい」

美月、口をモグモグしながら、

美月「行ってきまーす」

美月、鞆を持って玄関を出る。

○原宿駅・改札口（朝）

美月が、定期券を鞆から出し、駅内に入っていく。

美月、まっすぐホームに歩いていく。

○同・ホーム（朝）

たぐさんの人がホームで電車を待っている。美月、キョロキョロし、辺りを見回している。

美月「確か、この辺だと思ったけど・・・」

美月の背後から、

ルシナ「お嬢さん、何かをお探しかい？」

美月、驚いて振り返る。目の前に、ル

シナが立っている。

美月「あっ、その・女性を」

ルシナ、にやりと笑って、

ルシナ「その女性はある人じゃないかい？」

ルシナが、十数メートル先にいるアイナを指さす。

アイナが白線近くに立っている。

美月「あっ！」

列車がホームに入ってくる。

アイナがホームに倒れ込む。

アイナ、倒れない。

アイナの腕をつかんでいる美月。

アイナ、ハッと目を見開く。美月を見て驚く。

美月、にっこり笑う。

美月、思い出したように周りを見渡し、ルシナを探す。

ルシナ、人込みに消えてもう見当たらない。

アイナ「あの、ありがとうございました・・・」

アイナが美月におじぎをする。

美月、真剣な顔付きで、

美月「あの、良かったらお話でも・・・」

○スター珈琲店（朝）

美月とアイナがソファーに座っている。

美月「覚えてないですって！」

アイナ「ええ、記憶がないんです。どうして

ホームへ身を投げ出したのか・・・」

美月、考え込む。

美月「あ・・・」

○城南高校・D組（朝）

教室には、女子高生がたむろっている。

カルタ取りをするグループ。週刊誌を

片手に雄弁している女子高生。

窓ぎわで机を介してだべっている女子

高生も。

女子高生1「ねえ、美月ってさあ、ちよつと

変わってるよね」

女子高生2「うん、なんかどっかの魔女みた
いよね。昨日もさ・・・」

そこへ美月が教室に入ってきて来る。
女子高生1と2、美月を見て口をふさ
ぐ。

斎藤実（16）と金森優子（17）が美月
に近づいて、

優子「おはよう美月！」

実「美月！昨日は大活躍だったんでしょ？朝
刊に出たよ！」

美月、少し照れて

美月「たまたま通りかかったただけだよ・・・」
実「じっくり話、聞かせてよ！」

そこへ、松原紀子（26）が入ってきて来る。
紀子「授業を始めます！」

○同・D組（夕）

授業を終える鐘が鳴る。

優子と実が美月の元へ来る。

実「美月！」

実、にやりと笑う。

○スター珈琲店（夕）

美月と実、優子、カフェオレを飲んで
いる。

実、興味深々な顔。

実「それで、どんな風に人を助けたの？」

優子「実ったら、今日その話ばっかね」

実「だって、こんなこと滅多にないでしょ！」

美月と優子、苦笑いする。

美月、カフェオレに口をつけてカップ
を机の上に置く。

美月「・・・それで、その人覚えてないんで
すって」

実、身を乗り出して

実「嘘！」

優子、考え深げに

優子「不思議ね」

美月、ため息をつく。

美月「でも、もう一つ不思議なことが・・・」

美月・回想

○原宿駅・ホーム（朝）

ルシナ「お嬢さん、何かをお探しかい？」

美月、驚いて振り返る。

○もとのスター珈琲店（夕）

実、深くため息をつく。

優子、目を輝かせて、

優子「なんだか面白そうね」

スター珈琲店を出る美月と実と優子。

○川岸土手（夕）

空が紅色に染まっている。

美月と実と優子が土手に座っている。

土手下では、小学生たちが草野球を楽

しんでいる。

実「ここは平和ね」

優子「ほんと、そうね」

美月、笑いながら、

美月「そろそろ帰ろうか」

立ち上がり、家路に着こうとした時、
優子「ねえ、私たちが真相確かめない？」
実「なんの？」

優子「決まってるじゃない」

美月、優子、実、顔を見合わす。

○猪口家・玄関表（夕）

猪口家の外観。

玄関の扉を開けて入ろうとする美月。
その時、ドカンと大きな音がする。
驚いて音のする方を見る美月。

美月「何、あれ？！」

遠くで煙が立ち込めている。

美月「学校の方だわ！」

美月、走り出す。

○街路（夕）

煙が出ている方角へ走っている美月。

美月、蒼白になる。

美月の視界に燃えている学校。

○城南高校・前（夜）

そこへ丁度駆けつけて来た優子と実。

優子と実、息を切らして

実「美月、来てたのね！」

美月「ええ、実たちも」

実「うん、帰ろうとしたらこれだもん・・・」

美月、燃えている学校を見て、

美月「なんとかしなくちゃ！」

消防車がサイレンを鳴らして、学校の

校庭に入っていく。

消防車を追いかける美月、実、優子。

消防士、美月と実と優子に気が付いて、

消防士「危ないからここから出ていきなさいさ

い！」

後づ去りする美月、実、優子。

優子「どうしてこんな・・・」

優子、涙目で消防士がホースで消火す

る様子を見ている。

美月、眉間にしわを寄せて、

美月「一体、何があったっていうの？」

茫然と、燃える校舎を見つめている美月と実と優子。

○猪口家・リビング（朝）

美月が新聞を見ている。

新聞の見出し『学校消失、原因不明！』

美月「誰がこんなこと・・・」

美月、暗い顔。

○同・庭（朝）

美月が考え込みながら、ホースで庭に水をまいている。

草むらに黒い影が渦巻いている。

美月、知らずにまだ水まきをしている。

黒い影が美月を襲おうとする。

美月、気配を感じてか後ろを振り向く。

影、消える。

美月、首をかしげる。

美月「誰かいたような・・・」

○猪口家・リビング（朝）

美月が、庭からリビングに入っている。

美月の携帯電話が鳴る。

美月、携帯電話を取り

美月「実？」

実の声「美月、今からそっちへ行ってもいい？」

○同・リビング

リビングのソファーに座っている実と

優子。

美月が紅茶を入れて二人に出す。

実、ため息をついて、

実「ねえ、学校が燃えたのって、以前美月がホームで人を助けた事件と何か関係があるんじゃない？」

優子「どうしてそう思うの？」

実「なんとなくさ・・・」

優子「でも、関係があったとしても、私たちにどうすることもできないよ？」

美月「そうね」

優子「いっそのこと、警察に話したらいいんじゃないかしら？」

美月「でも、駅で起こった事件と学校の事件が繋がっているっていう証拠がないわ」

実、困った顔をして、

実「そうよね・・・」

ガチャンと庭でいきなり植木鉢が割れる。

美月と実と優子、急いで庭を見る。

実「何？気持ち悪い・・・」

美月と実と優子、顔を見合わせる。

ミツシエル「おいっ！」

美月、実、優子「キャー！」と悲鳴を上げる。

見ると、赤い髪をし、貴族のような恰好をした男が立っている。

「カイジ・ミツシエル（16）である。

美月と実と優子、驚いて、

優子「あなた誰？」

ミッシェル「俺か？俺は魔界から来た王子、
カイジだ」

美月と実と優子、口をぽかんと開けて、
実「・・・夢を見ているんだわ。きっとそうよ」

優子「そうね・・・」

美月「・・・ま、魔界？」

ミッシェル「失礼な奴らだな。お前らは知ら
んかもしれんが、魔界は本当に存在するん
だ。もう何千年も前から」

ミッシェル、少し偉そう。

美月「何千年も前から・・・？」

実「じゃあ、今までなんで誰も知らなかった
の？」

ミッシェル「エヘンツ、それはだな、俺たち
の多大な苦労の上、この世の奴らには誰に
もばれなかったんだよ」

美月「じゃあなんで今頃になって・・・」

実「そうよ！なんで今頃しやあしやあと」

ミッシェル「(遮って)仕方なかったんだよ。
とうとう魔界とこの世の扉が開いてしまっ

「ただ」

美月と実と優子、顔を見合わせる。

美月「カイジ、あなた何か知ってるの？」

美月、実、優子、顔を見合わせる。

○城南高校・跡地

焼け跡の残った学校。

美月、ミツシエルが学校を見ている。

ミツシエル、難しい顔をして、

ミツシエル「ひでえな」

美月「これ、魔界の仕業なの？」

ミツシエル、こくんとうなずいて、

ミツシエル「こんなことの出来るのは、ハル

マしかいない」

実「ハルマって誰？」

ミツシエル、それには答えず、

ミツシエル「あんた達の知っていることを全

部話してくれないか？」

美月、うなずく。

○スター珈琲店

テーブル席に座っている美月とミツシエルと実と優子。

奇抜な服を着たミツシエルを横目で見ている客。

ミツシエル、腕を組んで、

ミツシエル「そっか、そんなことが・・多分、そのホームで殺されそうになった女は、俺の姉さんだ」

美月「お姉さん？」

実と優子、興味深そうにミツシエルの話を聞いている。

ミツシエル「実は、姉さんが原因で魔界の扉が開いてしまったんだ」

美月、目をきらきらさせながらミツシエルを見ている。

ミツシエル、顔を少し赤らめる。

○魔界

T 2 0 1 2 年 9 月

アイナが、木の実を拾っている。
アイナの近くには、同じ魔界族の子供
たちが鬼ごっこをして遊んでいる。
それを見ているアイナ。
空には鳥が飛んでいる平和な様子。
突然、雲が黒くなり、渦を巻く。
アイナと子供たち、空を不安げに見つ
めている。
稲妻が鳴り響き、アイナが渦を巻いた
空へ吸い込まれていく。
アイナ、悲鳴を上げる。

○魔界

T 2 0 1 2 年 1 1 月

アイナが空を飛んでいる。

○魔界・王宮・上空

懐かしい王宮を眺めている。

アイナ、庭に出ていた使用人を見つ
ける。

使用人もアイナに気付く。

使用人「アイナお嬢様！」

アイナ、使用人の元へ降りていく。

アイナ「今、戻りました」

○魔界・王宮・中

アイナが王宮の中を歩いている。

サーシャ・ミツシエル（32）がアイナに駆け寄って来る。

サーシャ「アイナ！」

アイナ、サーシャを見て顔がほころぶ。

アイナ「お母さま！」

サーシャ、アイナを抱きしめる。

扉の奥から、サジナ・ミツシエル（56）が出てくる。

アイナ、サジナを見て顔をしかめる。

アイナ、一礼して

アイナ「ただ今戻りました、お父様」

サジナ、アイナを柔らかい目で見て、

サジナ「アイナ、よく戻ったな。今までどこ

におった？」

アイナ、下を向いて黙っている。

アイナ、しゃべることを決意し、

アイナ「私は、今まで敵方ハルマに囚われて
いました」

○魔界・王宮・庭

アイナが王宮の庭を歩いている。

庭にたむろっている鳥たちを見て、

アイナ「ここはなんて平和なのかしら」

アイナ、急にしゃがみ込んで、頭を抑
える。

アイナ、苦しそうに地面に倒れる。

使用人「アイナお嬢様！」

執事や使用人たちがアイナの元へ駆け
寄って来る。

○同・王宮・アイナの寝室

アイナがベッドで横になっている。

扉が開いて、サーシャが血相を変えて

入って来る。

サーシャ「アイナ」

サーシャ、アイナの手を取る。

目をつぶったままのアイナ。

サーシャ「アイナ・・・」

サーシャがアイナを心配気に見つめて
いる。

○スター珈琲店

ミツシエル、カップをそっと置く。

ミツシエルを見守る美月、実、優子。

ミツシエル「姉さんは、敵方カルダンによつ
て洗脳されていたんだ・・・」

美月、実、優子、息を呑む。

実「どうしてアイナさんは、洗脳されなけれ
ばならなかったの？」

ミツシエル、目をそっと上に向けて、
ミツシエル「ハルマは魔界を狙っているんだ」

○魔界

T 2 0 1 2 年 9 月

ハルマ・カルダン（53）が屋敷の暖炉の前でお酒を傾けている。

そこへ、執事が来る。

執事「ハルマ様、今アイナ様を拘束いたしました」

カルダン、目を輝かせて

カルダン「よくやった！ここへ連れてこい」
執事「はい、ハルマ様」

カルダン、嬉しそうに一人掛けのソファーから立ち上がる。

家来二人に連れてこられるアイナ。

アイナ、キツとカルダンを睨みつけ、

アイナ「放して！」

カルダン、家来に向かって

カルダン「放してやれ」

家来、アイナから手を放す。

アイナ「ハルマ、こんなことをしてお父様が許さないわよ。私をすぐに王宮にもどして」

カルダン、にやりと笑い

カルダン「そうはいかない。貴様にはまだ役割がある」

カルダン、家来に向かって

カルダン「地下牢へ連れていけ」

家来「はっ」

アイナ「放して！」

アイナ、無理やり連れていかれる。

○魔界・カルダン家屋敷・地下牢

薄暗い階段を下りるアイナとカルダンの家来。

牢の前で、

アイナ「私にこんなことをして、ただじゃ済まないわよ！」

アイナ、家来に向かって言う。

家来、何も言わず、アイナを牢に入れる。

○同・地下牢（夜）

牢の中で座っているアイナ。

急に牢の扉が開いて、家来がアイナを連れ出す。

アイナ、怒って

アイナ「私をどこへ連れて行くの！」

家来、アイナの質問を無視する。

○魔界・カルダン家・暖炉の部屋（夜）

部屋の扉が開き、アイナと家来が入って来る。

部屋の中には、カルダンがいる。

カルダン「やあ、アイナ。まあ、そこに座りなさい」

カルダン、高級そうな椅子を指さす。

アイナ、しかめ面のまま、椅子に座る。

カルダン「ワインでもどうかね？」

カルダン、一杯のワインをアイナに差し出す。

アイナ、無視する。

カルダン、その様子をせせら笑って

カルダン「毒は入っておらんよ」

アイナ、キツとなってカルダンを睨む。
そしてワインを一気に飲み干す。
カルダン、その様子を見ている。

アイナ、ワイングラスを床に落とす。

アイナ「これは・・・」

カルダン「今頃気が付いても遅いよ。まやかしの術に使うリング酒だ」

アイナの目がうつろになっていく。

カルダン、アイナに向かって

カルダン「アイナ、やって欲しいことがあるんだ」

アイナ、うつろな目でこくと頷く。

○魔界・王宮・アイナの寝室

T 2 0 1 2 年 1 1 月

目の血走ったアイナ。サーシャが気が付きアイナの名前を呼ぶ。

アイナ、サーシャの声が入らない。

サーシャ「誰か来て！誰か！」

アイナ、布団をはがし部屋から駆け出

す。

サーシャ、追いかけてようとするが間に合わない。

アイナ、廊下を走り抜けサジナのいる部屋の扉を勢いよく開ける。

中には、サジナとお付の者が四人いる。

アイナ、サジナをめがけて短剣を突き刺そうとする。

お付の者がとっさにアイナを抑える。

アイナ、暴れる。

サジナ、その様子を見ているが、やつと声を発する。

サジナ「アイナを見ていてくれ」

お付の者「はは」

サジナ、部屋からゆっくりと出ていく。

○スター珈琲店

ミツシエルがため息をつく。

美月と実と優子、

肩を並べてミツシエルを見ている。

ミツシエル「ハルナは、ずっと父である魔王を狙っていたんだ」

美月「そうだったの・・・」

実「でも、どうしても魔界の扉が開いてしまつたの？」

ミツシエル「分からない。でも多分、姉さんのせいなんだ」

優子「どうしてそうだと思うの？」

ミツシエル「実は、それから姉さんはまた王宮からいなくなり、その後、魔界とこの世の扉が開いてしまったんだ」

美月「じゃあ、お姉さんがその扉を開けてこの世まで来てしまったということなのね」
ミツシエル「そう、考えるのが、一番適切だと・・・」

ミツシエル、肩を落とす。

美月「待って。でも、アイナさんの他にもこちらの世界に来ている人がいるんじゃないかな。だって・・・」

実「そっか！アイナさん、誰かに命を狙われ

ていたもの！」

優子「それにあの廃墟になってしまった学

校・・・」

美月、ミツシエル、実、優子、顔を見
合わせる。

実「真相はこうよ。作戦に失敗したアイナさ
んをハルマが消そうとしたけど、美月によ
ってアイナさんは助かってしまった。それ
で、その腹いせに学校を廃墟にしてしまっ
た」

優子「強引だけど、そう考えるのが適切かも」

美月「でも、どうして私じゃなくて学校を狙
ったのかしら」

実「うーん、そうね。分からないわ」

優子「あっさりね・・・」

優子、あきれ顔。

美月、決心して、

美月「ここで考えていても分からないわ。あ
の駅のホームへ行ってみましようよ」

優子「そうね」

○原宿駅・中

階段を登っていく美月とミツシエルと実と優子。実、階段につまづいて転びそうになる。

優子「何やってるの？」

あきれ顔で実を見る。照れる実。階段を登ると、人でごった返している。

美月「あっ、あの人」

優子「美月、何？」

美月、走って先方にいる人を捕まえる。その人が振り向くと、あのルシナである。

ルシナ「おや、あんたは・・・」

優子「この人は？」

美月「あの事件の時、いた人よ」

ルシナ「あのお嬢さん、本当に助かってよかったねえ」

ルシナがにたにた笑う。

ミツシエル「お前は・・・」

ルシナ、ミツシエルに気付く。

ルシナ「あんたは・・・」

ルシナ、ギョツとして逃げようとする。

実、とっさにルシナの腕をつかみ、

実「逃がさないわよ！」

ルシナ、諦めて

ルシナ「痛いよ・・・」

実「どうして逃げるのよ」

ルシナ、後ろめたそうにする。

美月と実と優子がルシナを睨んでいる。

ルシナ、あきらめたように首をすくめ、

ルシナ「分かったよ。話すよ・・・あの日、

私はいたのさ。あの場所に」

○魔界・この世と魔界との境・魔界側

T 2 0 1 2 年 1 1 月

アイナが魔界とこの世の扉の前にいる。

手に紋章のあるナイフを持っている。

アイナ「パナソワラナソワナ・・・」

アイナの目が白く光り、まばゆい光が

アイナを覆う。

扉が徐々に渦を巻いて開いていく。ゴ
ォーという大きな音がして、この世と
魔界の境が開くと、アイナがその穴か
ら消えていく。
その様子を近くで見っていた竜がアイナ
の後を追うようにして穴の向こうに消
える。

○原宿駅・ホーム

美月とミツシエルと実と優子、竜鳥が
ホームにたたずんでいる。

ミツシエル「お前は、そうか・山に住む竜
鳥（りゅうちよう）だな」

ルシナ、深くうなずく。

実「りゅ、流鳥！」

美月と実と優子、驚愕の表情でルシナ
を見る。

ミツシエル「竜鳥は、そもそも我らの敵でも
なく味方でもないはず。なのに、なぜ姉さ
んを助けたんだ？」

ルシナ「気まぐれさ」

実「き、気まぐれ？」

ルシナ、ふふんと笑って、

ルシナ「誰だっけって考えるだろうさ。帰り道のことを」

優子「なるほど・・・」

実と優子、あきれ顔。

美月、真剣な顔つきで、

美月「今、アイナさんはどこに？」

ルシナ、首を振って

ルシナ「さあ、知らないね」

ミツシエル「おい！隠してると、ろくな目に

合わんぞ」

ルシナ、首をすくめて

ルシナ「隠してるわけじゃないさ。本当に知らないだよ。ただ・・・」

美月「ただ？」

ルシナ「いいことを教えよう。魔王は、アイナの持っている銀の短剣でしか殺せないのさ」

ミツシエル「なんだと！」

ルシナ、手を振って、

ルシナ「そういう言い伝えがあるんだよ。魔王を殺すには、魔王の手で作った剣でしか殺せない」と

美月「なんで魔王は自分を殺せるような剣を作ったのかしら？」

ミツシエル「その剣は、もしかしたら自分を殺すためじゃなく、敵を殺すために自分の一部を練り込んで作られたんだ。そして、その剣は最強の剣となったんだ」

ルシナ、頷いて

ルシナ「だから言ったんだ。魔王を殺すにはその剣以外にはないと」

ルシナ、自慢げに言う。

ミツシエル「ふんと鼻を鳴らし、ミツシエル「なんか、気に障るな」

美月「仲間割れしてる場合じゃないわ！」

ミツシエル「誰がこいつなんかと！」

美月と実、あきれ顔。

優子「一刻も早くお姉さんを探し出さなき

や・・・」

実「でも、どうやって探すのさ？」

美月とミツシエルと実と優子、考え込
んで、

美月「ねえ、学校へ行ってみない？」

○空

大きな竜にまたがっている美月とミツ
シエルと実と優子。竜は大きなうねり
をかいて空を進んでいる。

実「わぁー素敵！」

優子「こんなこと信じられないわ」

美月「ほんと、夢のようね！」

実「ヒヤッホー！」

渡り鳥が、竜の前を横切っていく。

美月「渡り鳥だわ！」

渡り鳥の中の一羽がそれに応答するよ
うに鳴く。

すると、竜が急にうねって、下降し始

める。

ミツシエル「うわぁー」

美月と実と優子は興奮している。

ミツシエル、独り言。

ミツシエル「もう少し緩やかに降りてくれる

と・・・」

竜が一鳴きする。

猛速度で地上に向かって降りていく竜。

美月とミツシエルと実と優子、悲鳴を

あげる。

すると竜、ふわっと翼を広げ緩やかに

地上に降り立つ。

ミツシエル「ふうー」

美月「あなた、高所恐怖症ね」

ミツシエル「うるせえ」

ミツシエル、恥ずかしそうにそっぽを

向く。

美月と実と優子、笑っている。

竜がもう一鳴きする。

○城南高校・廃墟・敷地内

美月とミツシエルと実と優子が廃墟と
なった校庭に降りる。

竜、翼をたたみ、元のルシナの姿に戻
る。

実「すごかったわ！」

実、まだ興奮から覚めない。

ルシナ、微笑む。

廃墟の方に進む美月とミツシエルと実
と優子と竜鳥。

すると、燃えカスの中から一つの塊を
見つける。

ミツシエル「これは・・・？」

ミツシエル、塊を拾い上げるとルシナ
に見せる。

ルシナ、ニヤリと笑い

ルシナ「おや、もう見つけたのかい？」

美月「それは？」

ミツシエル「これは短剣さ」

実「それが、お父さんを唯一殺すという短

剣？」

ミツシエル、じろりと実を見る。

実「あっ、つい・・・」

実、苦笑いする。

美月「じゃあ、もしかしてここにアイナさんがいたっていうこと？」

実「アイナさんは？」

美月とミツシエルと実と優子、辺りを見渡す。

ミツシエル「やい、竜鳥！お前、ここに姉さんがいたこと知ってたんだろ？」

ミツシエル、ルシナの襟を持ってルシナを脅す。

ルシナ、手を振って

ルシナ「や、止めてくれ！アイナがいるとは知らなかったんだ」

美月、ルシナを睨んで

美月「(口調を強めて) どういうこと？」

ルシナ、口をすぼめて、

ルシナ「ほんと、かなわんよ」

そこへ、ガサツと音がしてアイナが現れる。

美月「アイナさん！」

アイナ、美月に気が付き、

アイナ「あなたは・・・」

ルシナ「あんた、生きてたのかい？」

ミツシエル「やい！お前！」

ミツシエル、ルシナに殴りかかろうとすると、

アイナ「止めてミツシエル」

ミツシエル、殴りかかるのを止める。

美月「アイナさん、訳を話してくれませんか？」

アイナ、こくつとうなずく。

○この世・魔界との扉・この世側

T 2 0 1 2 年 1 2 月

この世と魔界との扉を潜り抜けてこの世に入ったアイナ。

アイナ、まっすぐ都会の方へ飛んでいく。

○原宿・街並み

たくさんの人たちが行き交っている。
街を歩いているアイナ。
アイナ、王族の衣装で目立つ。
アイナ、一つの洋服を売っている店の
前で立ち止まる。中へ入っていく。

○洋服店・中

店主「いらっしやい」

店主、アイナの服装を不思議そうに見
ている。

アイナ「これをくださいな」

アイナ、一枚の服を指さす。

店主、にっこりと笑い、

店主「3500円です」

アイナ、ポケットから札を出して店主
に渡す。

店主「ありがとうございます」

アイナ、新しい服を着て店から出る。

店主、アイナからもらった札を見ると、

ただの紙切れになっている。

店主、驚いて

店主「待てー」

アイナを追いかけてよとするが、アイナの姿はどこにも見えない。
店主、はあはあと息を切らしている。

○原宿・街並み

アイナ、歩いている。

ハツとして、後ろを振り向く。

誰もいない。

アイナ、険しい表情になる。

ポケットに入れている短剣を握りしめる。

角を曲がるとさっと建物の影に隠れる。

刺客らしき者が二人、前を通り過ぎる。

アイナ「既にここも手がついてる・・・」

アイナ、路地から空を飛んでいく。

○空

空を飛んでいるアイナ。下界には、美しい景色が広がっている。後ろに気配を感じるアイナ。先ほどの追っ手が二人、同じ速さでアイナを追ってくる。

アイナ、速度を速める。

追っ手1 「くそっ」

追っ手2 「俺は、回り込む」

追っ手2、降下していく。

追っ手1、それを見ている。

アイナと追っ手1、どんどん距離が離されている。

追っ手1、追うのを諦めてアイナを見ている。

追っ手1も降下する。

一人になったアイナ。

階下を見ると、学校が見える。

アイナ 「あそこを借りよう」

アイナ、学校へ降下していく。

○城南高校・敷地内（夕）

アイナが敷地内に降りる。

誰もいない校庭。

日が暮れかけている。

○城南高校・中（夕）

アイナ、校舎に入っていく。

アイナ、階段を上がり三階で止まる。

廊下をどんだん歩いていく。ふと、右

側の教室に目を止める。D組の表札。

アイナ、D組に入り、窓から空を見上げる。

その時、背後から音がする。

アイナ、ギョツとして後ろを振り向く

と、槍を構えた追っ手2が立っている。

アイナ、ニヤリと笑って、

アイナ「お前たちが欲しいのはこれだろう」

アイナ、持っていたナイフをかかげる。

追っ手2、ナイフを奪おうとアイナへ

向かってくる。

アイナ、窓からナイフを外へ投げる。

追っ手2「くそっ」

追っ手2、ナイフを追って窓の外へ飛ぶ。

アイナ、その様子を見ている。

アイナ、本物のナイフをポケットから取り出す。

アイナ「命拾いした」

アイナ、そう言うと呪文で紫色の炎を手の平から出し、ナイフを燃やす。炎は広がり、校舎中に広がっていく。

アイナ、炎の中、立ち去る。

○城南高校・廃墟・敷地内（夕）

美月とミツシエルと実と優子がアイナの話の話を聞いている。

実、怒って

実「あんたが、学校を燃やしたのね」

アイナ、幾分悪そうに

アイナ「ごめんなさい。あなた方に迷惑をか

けてしまいましたね。いつか、学校が戻る
ことを祈っています」

実「って、他人事かよ」

実、ふてくされた顔。

優子「まあ、いいじゃない」

美月、真剣な顔で、

美月「でも、またいつハルマの追っ手がやっ
て来るか分からないわ」

ミツシエル「そうだな。用心するに越したこ
とはないな」

アイナ「大丈夫よ。彼らは私が死んだと思っ
ているから」

美月「そうだといいいけど・・・」

ルシナ「ところで、あんた達いつ魔界へ帰る
気かい？それに・・・」

美月、ハツとする。

美月「この世と魔界の扉を閉めなきゃ！」

ミツシエルとアイナ、美月の言葉にう
なづく。

○猪口家・美月自室（夜）

美月が心配そうに窓から空を見ている。

満月が神秘的に光っている。

満月に雲がかかる。

○この世と魔界の境・この世側（夜）

渦を巻いている穴。

ミツシエルとアイナ、竜鳥が穴（扉）

を見つめている。

アイナ「ミツシエルとおばあさんは先に魔界

に帰って」

ミツシエル「姉さんはどうする気だ？」

アイナ、真剣な顔。

アイナ「私はこっちに残る」

ミツシエル「何、言っただ！」

アイナ「まだ、こっちの世界に追っ手が残っ

ているかもしれない」

ミツシエル「じゃあ、なおさら駄目だ！」

ルシナ「あたしや、先に帰らせてもらおうよ。

もう十分楽しんだから」

ルシナ、せせら笑うと、扉へ向かう。

アイナ、それを見送ると、

アイナ「心配しないで」

アイナ、元の道に戻っていく。

ミツシエル「姉さん！」

ミツシエル、悔しそうに

ミツシエル「くそっ！」

ミツシエルもアイナを追いかけていく。

○空（夜）

空が渦を巻いている。

アイナが空から降りてくる。

○城南高校廃墟・敷地内（夜）

アイナが敷地を歩いている。

アイナ「彼らは必ず戻って来る」

アイナ、空を仰ぐ。

満月を見つめるアイナ。

満月の中に黒い影が動く。

その瞬間、その影が槍でアイナを突き

刺そうとする追っ手1に変わる。
アイナ、間一髪で槍をかわす。槍は、
土に突き刺さり、土が舞い上がる。
アイナ、とっさに近くにあった廃材の
中から武器になるようなものを探す。
鉄の棒のようなものが見え、それを取
ろうとするアイナ。
追っ手1は邪魔をしようとアイナに襲
いかかる。
アイナ、逃げながら武器を手に取り、
追っ手1の腹を刺す。
追っ手1、苦しみながら倒れる。
アイナ「危なかった」
アイナ、武器を放し、追っ手1の側に
転がっていた槍を手にする。
手をかざし、空を再確認する。
静寂さが訪れる。
アイナ、空に背を向けて歩き出した瞬
間、頭を打たれる。
アイナ、地面に倒れ込む。

アイナ「ううっ」

アイナ、動けない。

追っ手2「とどめだ」

追っ手2、持っていた槍でアイナを刺そうと構える。

ミツシエル「待て！」

追っ手2が振り返ると、ミツシエルが後ろに立っている。

追っ手2、ミツシエルを見ると、顔の表情が変わる。追っ手2、ミツシエルに襲い掛かる。

アイナ、もうろうとしながら、その様子を見ている。

アイナ、力を振り絞って

アイナ「カイジ！」

アイナが持っていた槍をミツシエルに投げる。

ミツシエル、槍を受け取る。

ミツシエル、槍を構える。

ミツシエル、土を蹴って、飛び上がる。

追っ手2とミツシエルの槍が交差する。
ミツシエルが力で追っ手2を押す。
追っ手2、ミツシエルの槍を払い、横
へ逃げる。そして、そのまま廃墟の上
まで逃げる。
ミツシエル、追っ手2を追って廃墟の
上まで飛び上る。
ミツシエル、追っ手2を廃墟の突き当
りまで追い詰める。追っ手2、下（地
面）を見る。
ミツシエルの目が燃えるような赤に変
化していく。
ミツシエル、上空へ飛び上がり、追っ
手2に槍を向けて襲い掛かる。
アイナ「もう止めて！」
ミツシエル、ハツとする。
目が白く戻り、槍を降ろす。

○空（夜）

満月が大きく見えている。

その前を動く三つの黒い影。

ミツシエルとアイナ、ミツシエルに鎖でつながれた追っ手2。

○この世と魔界の境・この世側（夜）

穴が揺らいでいる。ゴォーという音をたてて徐々に穴がふさがっている。

この世と魔界の境まで到着したミツシエルとアイナと追っ手2。

ミツシエル「まずい！早くしないと穴がふさがってしまう！」

ミツシエル、アイナ、追っ手2、穴へ突進していく。

アイナとミツシエルが穴をすり抜ける。

○同・魔界側（夜）

追っ手2、急きよ体を反転させ、逃げようとする。

追っ手2に引っ張られ、ミツシエル、この世側に戻される。

アイナもとつきにミツシエルの後を追う。

○同・この世側（夜）

ミツシエル「うわっ」

アイナ「カイジ！」

ミツシエルと追っ手2、取っ組み合いになる。

バランスを崩し、下へ落ちていくミツシエルと追っ手2。

アイナ「カイジ——」

バランスを取れず、どんどん落下するミツシエル。

すると、突然体を何かに救われる。

竜鳥がミツシエルと取っ手2を拾いあげる。

ミツシエル、ホッと胸をなでおろす。追っ手2を見ると、ぐったりとしている。

竜鳥が一鳴きして急上昇していく。

穴はまさにふさぎかけている。

アイナ「カイジー、早く！」

カイジ、竜鳥、追っ手2、アイナが穴をすり抜けると穴が間一髪で閉まる。

○魔界・王宮（夜）

王宮の中へ入っていくミツシエルとアイナと追っ手2。駆け寄って来る使用人たち。

廊下の奥から、サジナとサーシャも駆け寄って来る。

サーシャ「アイナ！」

アイナ「お母さま！」

サーシャ、アイナを抱き寄せる。

サジナ「アイナ・・・」

アイナ「お父様・・・」

サジナもアイナを抱きしめる。

アイナ、嬉しそうに泣く。

サーシャ、ミツシエルを誇らしげに見て、

サーシャ「よく、アイナを連れ帰ってくれ
ましたね。カイジ」

ミツシエル「なんてことねえよ」

ミツシエル「照れて頭をかく。」

アイナ、「何、照れてんの」

ミツシエル「そんなじゃないってば・・・」

ミツシエル、赤くなつてそっぽを向く。

ミツシエル、ハツとして、

ミツシエル「そういえば・・・美月たちにどう
やつて知らせたらいいかな・・・」

○猪口家・リビング（夜）

テレビを見ている美月。

キッチンでは五月が洗い物をしている。

ミツシエルの声「美月・・・」

美月、ハツとする。

美月、走つてリビングを出て行く。

五月が振り返り、不思議そうな顔で、

五月「美月？」

美月、玄関へ行き、扉を開ける。

外にミツシエルが立っている。

美月、驚いて

美月「カイジ！」

○住宅街（夜）

道をゆっくりと歩いている美月とミツシエル。

ミツシエル「美月、ほんとにありがとうだな。お前たちのお陰で、俺たちは姉さんを見つめることができた」

美月、照れて、

美月「そんな・・・皆のお陰だよ！」

ミツシエル、美月を真剣に見て、

ミツシエル「もう少し、お前と居たかった

な・・・」

美月、ドキツとしてミツシエルを見る。

美月の頬が赤く染まる。

大きな満月が輝いている。

○猪口家・美月寝室（夜）

美月がベッドで熟睡している。

むにやむにやと寝言を言っている。

美月「・・・カイジ・・・」

美月の幸せそうな寝顔。